

「まちの整体」という視点を提唱している。地方で未利用・低利用なまま抱えられている公共施設群の再編を軸にしながら、人口3割減時代を見据え、地方都市の広義の適正規模化を図るものである。いわゆるコンパクトシティ論のように聞かせるかもしれないが、都市構造に対する捉え方と目標の描き方がそれとは本質的に異なる。

地方の小都市は、国レベルの高度成長・人口増加における生産と消費に追従すべく、これまで必死になって筋肉をつけてきた。筋力を上げるためなら、中央からのドーピングも積極的に受け入れた。しかし当然、そのよくな不自然な筋肉増強は本来の骨格には見合わない。筋肉とのバランスを欠いた骨格は、生産と消費に酷使されることで様々な歪みを生じることになった。そして、低成長・人口



北海道大学大学院工学研究院教授

森 傑氏

減少への変化の中で次第に痩せ細り、ごまかし続けてきた歪みも、生活に支障をきたす痛みや病となって現れはじめた。「まちの整体」は、地方都市の歪みを本来もっている骨格へ整え、老いが進みながらも適切な代謝を維持し、大手術や投薬に頼ることなく最期まで自力で食べて歩ける身体を維持する。これからの再建するぞ、これから再建するぞという意気込みを見せ、失った。「まちの整体」は既存の更新が前提であるが、集団移転は全く新しい身体として生まれ変わるにも近い。被災しなくとも数十年後にはおそろしく、まちをたたむのか否かの選択を迫られたことであろう。そのような小泉に何十年・何百年もまちを持つていかん大きな意味を持つのかを改めて考えざるを得ない。正直悩ましい。しかし、そこで生きる人々が希望と意欲をもつて生まれ変わりを望むのであれば、専門家として全力で支援したい。子供・孫としてその次の世代への想像力を働かせることができれば、持続可能な新しい身体を得る絶好の機会である。国土建設・地域づくりの提言を頂いております。本日から3回シリーズで寄稿文を掲載します。

集団移転は未来への贈り物

消滅すると予想される集落は百数十にのぼるといわれる。しかし、このような消滅という衝撃的な未来予想図でさえも、国全体が人口減少しているのだから仕方がないと、妙に世間は納得しているところがあるようだ。はたしてそうだろうか。かなり不合理な消滅もその中には多いのではないかと。先の比喩に絡めると、ドーピングが切れたあと、大震災という現実を直面している。これまで被災した大手術や投薬による寝たきり状態、その行く末としての消滅なのではないかと思っている。日本の地方都市のあり方として挑戦的に検討したい将来像がある。これからの急速な人口減少を見据えると、大都市や中核都市へ人口が移動し、弱小都市は消滅していくと想定するのが一般的な

リハビリティであると思うが、あえてそれとは異なる将来の可能性を描いてみたい。それは、日本各地で1万人規模のまちが自立的に持続していくような時代、大都市・中核都市は大幅に人口が減少するが、地方の小都市は「まちの整体」に取り組み、人口1万人を維持していくというあり方である。さて我々は今、東日本大震災という現実を直面している。これまで被災地を三度訪問した。阪神・淡路大震災を経験した身であるが、全く被災の性質が異なるということを感じた。被災地の中には、震度直感的に理解した。阪神神のときは、自分の家があったところという痕跡がその場所に残っていた。今回はその手がかりが全くない。阪神では、被災後すぐに自分の土地へ小屋をセルフビルドして、これから再建するぞという意気込みを見せ、失った。「まちの整体」は既存の更新が前提であるが、集団移転は全く新しい身体として生まれ変わるにも近い。被災しなくとも数十年後にはおそろしく、まちをたたむのか否かの選択を迫られたことであろう。そのような小泉に何十年・何百年もまちを持つていかん大きな意味を持つのかを改めて考えざるを得ない。正直悩ましい。しかし、そこで生きる人々が希望と意欲をもつて生まれ変わりを望むのであれば、専門家として全力で支援したい。子供・孫としてその次の世代への想像力を働かせることができれば、持続可能な新しい身体を得る絶好の機会である。国土建設・地域づくりの提言を頂いております。本日から3回シリーズで寄稿文を掲載します。

国土建設・地域づくりへの提言